

る。元々、やはり厳密な天體觀測上の原則から定められたものであるが、觀測技術が或る程度に進歩して、天體運行の週期などが一應公認されて了うと、それから後は、この公認の週期のみ依存して、觀測とは無關係に、机上の計算のみから先きの先きまで曆日が算定されて了うことは東洋にも西洋にも屢々あることである。ユリウス曆と天象とが10日とずれて了つて、1582年にグレゴリ曆に改められたり、又、我國や支那でも計算上の曆が屢々天象から離れ、それが改曆の動機となつた場合が多い、とにかく、今日、イスタの定め方は、天體觀測と全く無關係な机上の法則になつて了つてゐるのである。勿論、天體と甚だしく違つてゐるのでないから、普通の年は普通の方法で宜いのであるが、今年のやうな特別な珍しい年は問題となるのである。

對日照の偏光度*

Observation of Polarization of Counter-glow.

理學博士 竹内時男 by *Tokio Takeuti,*
齋藤馨兒 *Kaoru Saito,*
理學士 藤澤信 *Makoto Huzisawa.*

この篇、故理學博士平山清次先生の御靈に獻る。英文原稿を先生の御許に送り、帝國學士院に御發表を乞ひし直後、御發病御入院となり、井本進氏と、北海道日食觀測直後、御見舞に參上せし際は、種々御訓話賜はり、その中、内容に就いて質問せし上、學士院に紹介せんとのことなりしが、遂に先生の御他界となりたり。よつて本誌に發表することとせり。

水晶球一雙レンズに、軸は東西と南北に置ける Zeiss の Herotar 偏光板を併用したる偏光寫眞機にて、對日照を撮影せり。乾板は、特殊富士汎色乾板なり。1942年十月より十一月に亘る間、3回の機會ありたり。

その一例として次を掲ぐ。

十一月9日、露出2時15分~3時15分 { 赤經 2時50分
赤緯 17°;
離角 179°

2板の寫眞の黑さを、光電池と、ミリヴォルト計にて測り、偏光度として、0.045を得たり。偏光振動は太陽鉛直面に垂直なりき。仰角は約80°なり。露出に當りては、機械を廻轉して、對日照の移動を追へり。

* 東亞天文協會紀要 O. A. A. Memoirs No. 84.